

あの悪魔のようだった六月。早くも五カ月がすぎ去った。あの思いもしなかった大西山くずれ。六月二十九日朝九時三十分。忘れもしない、あの時のおそろしい気持が、今じつとしているとありありと浮かんでくる。二十八日少し晴れたので田の水を見に行つた。ああ、その田が最後だとは夢にも想像してもみなかった。一瞬の間に広々とした三十町歩余りの島河原の水田、大河原の一番の宝が「アツ」とさけぶまに真っ黒などろまみれな姿となって現われた。見るも残酷な姿である。今少し前の青々とした稲が消えてなくなつた。どっかりとすわっているくずれ落ちた大西山の岩石が、私の目に強くいじ悪く見える。尊い大勢の人命をうばつた大西山に対し、悪く思わないではいられない。だが、あんな恐ろしいしかけを作り出したのだろう。今あのことを思い出すとゾツとする。私はくずれおちている岩石に目が向けられない。三十町歩余りの水田が河原となつて石がゴロゴロしている。これは、天災だ。人間は手も足も出ないありさまだ。いかに自然の力、天の力というものが恐ろしいか、この災害でありありとわかる。

私の家でも田んぼを全部流し、  
「どうやって一日一日生活をおぎなっていくか」と心配になる。

特に私の家では、土台となるおとうさんがいないのでとつても困る。子どもたちの私たちにまで影響する。畑だけの農作物では食べていけない。人間で一番大切な「食べ物」これがなかったら人間は生きていけない。年ごとに増していく品物。お金をはらつて買い入れなくてはならない。これからの生活はぜいたくができない。米一粒だつて大切にあつかわなくては食べていけない。私の家でも少しは売っていたのだが：：。来年からはそんなどころではない。今まで買って食べていた人たちの寂しい、つらい気持を味わうわけだ。悲しい買物がふえた。今までだつてそんなに豊かでなく、せいっぱいに生活してきた。それを一段深めた悲しい苦しい毎日がつづく。

買う時になつてお米の尊さを知つた。苦しい毎日毎日がすぐそこまで来ているように感じる。青木の田を見るたびに、

「田んぼのある人はいいなあ。」とうらやましい気持になる。

「一粒もない。」なんて今までにないことだから夢のようで、うそのようで今だにそういう気になれない。お米さえあればどんなことだつてできる。明るい豊かな楽しい毎日が続く日はいつくるだろう。

(三十六年)